

新しい京都の歴史をひらく（61・4・19）

林田 悠紀夫（昭11文丙）

どうも失礼致します。私は十一年の文丙の卒業でございまして、三高の卒業生は「自分があった時分は非常によかった。」と、皆さんおっしゃいますが、私もおりました時分は大変よかったですと胸を張って言える時代に卒業をしたものでございます。

「自由」の精神を若い時に植え付けられましたので、この知事になりましたからも、自由闊達な京都府を作りあげていきたい、そういう気持ちで今までやってまいりました。やはり自由な精神がありませんと、文化にしましても、學術にしましても、あるいは産業にいたしても発展をしないわけであります。また覚醒の歌には、「なに平安の小三里に我らが夢をこと寄せん。」とありましたが、この京都の小三里に我が夢をことよせているような小ぼけなことではだめだという気概を持ちまして、世界に開かれた京都を創っていききたいと、大きな気持ちでやってまいったんでございます。

まず第三高等中学校が大阪から京都へ移転してきた明治二十二年頃には有名な北垣国道という知事がおつて、府から補助金を出して京都を学術の都にするために誘致しました。丁度明治二十七年に、平安奠都千百年祭が行われまして、疏水の築造、水力発電、市街電車の運行開始など新しいプロジェクトが京都で実施をされまして、それを契機にして、明治維新で首都が東京へ移つて以来困憊しておりました京都府市民が再び立ち上がることができ、新しい産業も発展して現在に到つたわけでございます。それ以来丁度百年目があと八年でやってくるわけでありまして、それを節目にいたしまして、更に京都を新に奮い立たせたいと、建都千二百年を記念する、いろいろなプロジェクトを行い、またイベントをやつていこうと考えました。その六年前に京都で二巡目第一回の国体を行うことを決定させ、建都千二百年の六年後は二十一世紀を迎えますので、新しい世紀へ京都の飛躍を図つていこうと考えたのであります。国体を京都で行いますにつきましては、国体を一つの節目にいたしまして、戦後、大変遅れておりました生活産業基盤の整備をやつていこうとしたのであります。何といたしまして、京都府だけの資金では限られた仕事しかできませんので、国からも相当の資金を導入する必要があります、それには何かイベントを考えて、それを契機にしてやつていくのがよろしい。そこで国体を持ち出しまして、丁度昭和二十一年に京都で国体が行われて、荒廃のどん底でありました日本中の人々が京都に集まって参りまして、精神的にも復興の気概をもち、毎年各府県で行なわれるようになりまして、日本中あちこちに

段々と道路やスポーツ施設など社会資本の充実ができてまいりました。そこで二巡目第一回は、最初の国体が行なわれたこの京都でなければならんと、国の方に申しまして決まったわけでありませう。そして京都は、王朝時代以来文化と学術の蓄積を有している都市であります。そこで二十世紀に亘りまする京都のビジョンを作定したいと考えまして知事に就任しますと直に、二十世紀ビジョン懇談会をつくりまして、多くの学識ある方々にお集まりをいただいて、——この中にも参加していただいた先生方がいらっしやるわけでございますが——、東京からも大阪からもおいでをいただきました。二年かかって京都についての新世紀にわたるビジョンを作りあげていただきました。同時にまた文化懇談会というのを設けて、これまた文化人に集まってもらって議論していただきましたところ、日本の文化は京都の文化であり、その逆もまた真なりと言っていただけるようになります。京都の文化についての評価が非常に高まったわけでございます。然し現在の京都は他の都市にくらべて、極めて遅れが目立っていると言う評価でありました。

最近、パリにいたしても、あるいはローマにいたしても、大きな新しい都市は、古い文化都市の周辺において行われるようになっております。私もパリではエブリニュータウンをつぶさに視察をいたしました。パリから高速自動車道路で、だいたい一時間ぐらいで行ける所に新都市をつくっております。パリでは、ニュータウンをドゴールの時代に造り始め、放射状に高速道路で結び、まあそれが非常に成功してきておるわけでございます。イールドフランスと称

される科学都市もできております。またローマは御承知のように、ローマ空港を降りたちますると、すぐそこにニュータウンができておるわけでありまして、これはムツソリーの時代から始めたわけでございます。そしてニュータウンには三つの省が移転をできており、文化モニメントもでき、現在は、新しい町と旧ローマがつながってしまっていて、まあ新しい町というわけにはいかんぐらいになっておるんであります。京都のような古い文化都市では、パリやローマのように古い文化はこれを保存をいたしまして、そしてその外に新しい町造りを行って、京都の文化はかつては日本の文化であったが、現在は遅れをとっているという状態から脱却しなければなりません。

私はこれを「グレーター京都」と申しまして、京都の外に新しい京都を造りまして、その間を三十分ぐらいの高速道路で結んでいかなければならんと考えたのであります。そこで、丁度奥田東先生が提唱をされました「京阪奈丘陵の学術都市」に乗っかりまして、これを推進していこうと、いうことにしたわけであります。そして学術というだけではなくって、文化という言葉を上にくっつけてまして「文化学術研究都市」という名称を打ち出しました。そして更にこれは京都だけのものではない。関西全体のもの、日本の新しい時代におけるプロジェクトとしても、これを推進していかなければならない。関西の各府県にあります大学でありますとか、あるいは研究所でありますとか、そういう施設を結びますところの、その中心にこれをしたてあげていくと、

まあこういう考え方のもとに、関西文化学術研究都市と、こういう名前にしたわけであります。そこでこれが国として決まりましたのは、昭和五十六年であります。私五十三年に就任を致しましたので、就任しましてからまあ三、四年ぐらいたって始めて決まったわけであります。提唱しました時は、京都にというのではなくって、大阪の千里ニュータウンとか、播磨の西方地帯とか、あるいは葛城山系の地帯とか、候補地をあちこち国が調査いたしまして、その結果、京阪奈丘陵が最適であると五十六年に決まったのであります。この土地は京都からまあ三十分、奈良からは数分でありまして、大阪からも三十分で行ける便利なところに一万六千ヘクタールぐらいの丘陵地帯が横たわっております。その中の二千五百ヘクタールをこの文化学術都市造りに使おうと、ということになったのであります。そこで世界の状況を見てみますると、もう今や、サイエンスシティばかりであります。

また進んだ都市はコンベンションシティの方向を旨ざしております。それで先進国のサイエンスシティがどういうように進んでおるか、これを府の職員を派遣いたしまして、調査をされたわけであります。また京都・大阪・神戸の経済界においても大きな関心をもっていただき、各国を視察してもらいました。京都では昨年、国際会議場におきまして、サイエンスシティのシンポジウムが行われました。世界の学者が京都へ集まってこられました。そこでこれから新しい世紀に向いまして、まあどういふ風にこの世界が進んでいくかと、いうことであります。日本を

先頭にして、高齢化時代が急速に到来をすることは、これはもう明らかなことでございます。医学が進んでまいりまして、皆さんが健康を保持していただいて、長生きをしていただくとともに、大規模な戦争による殺戮がそんなになくなって、みんな生命を全うし得るようになるであろうということ。またもう一つは、科学がどんどん進んでまいり、世界的に情報化の時代に入っていく、今世界のどこかの片隅におきまして何か事件が起こりましたならば、もうすぐ情報が衛星を通して飛びこんでくる、とこういう時代になってまいりまして、そしてまた、これからも電話でも映像でもみんな一緒になって、人々の所へ入っていくわけでありまして、あるいは台所からショッピングも出来るというようなことになってまいり、そういう情報化がもう非常に進んでくる時代を迎えるわけであります。我国は資源のない国であるということとはもう言うまでもないわけで、そしてただ優れた人間こそが資源でありますので、特に高齢化も進んでくるといふ厳しい時代に向いまして、我国としましては、できるだけこの「人間の知識」を闊達に大きくしていくような政策を採っていかなければならんと存じます。だからそういう時代に京都が、日本におきまする中心的な役割を果たし世界に貢献してまいりまするためには、京都がサイエンスシティにならなければならぬわけでありまして、人間の精神的うるおいの求められる時代、文化のシティにもならなければならぬわけでありまして、それで世界のサイエンスシティというものを見てまいりますと、昨年京都におけるサイエンスシティのシンポジウムに來たフランス人が説明しておりま

したイールドフランスは、パリの近くに拓かれつつあるサイエンスシティを言うのであります。またフランスにおきましてはこのイールドフランスばかりではなくって、南の方に新しいサイエンスシティが二つぐらい出来ておるわけでした、強力にこれを推進しております。アメリカにおきましてはもう御承知の通り、マサチューセッツ州のボストンの近く、またノースカロライナ州のトライアングル地帯、それからカリフォルニアのサンフランシスコの南の方のシリコンバレイと言われている地帯等が拓かれております。イギリスもケンブリッジの近くに立派なサイエンスシティが出来ており、ベルギーにおいても然りです。そして単にその国だけのサイエンスシティではなくって、世界に開かれた町になっておりました、例えばケンブリッジのそのサイエンスシティにおきまして、日本の企業が既に数社進出しているというようなわけでありまして、フランスの南部の方でもそうであり、またアメリカにおきましても然りでありまして、それぞれ世界に開かれたサイエンスシティになっておるわけです。そこでそういうような町をこの京都につくって、グレーター京都にしていきたいと、特に岡本道雄先生が言われる基礎学問を進めるところにしてゆきたいと存じます。

それをやろうと思いますと、これはまあ理論の問題ではなくって、その実行が伴わなければならんわけでありまして、実際の政策をどういう風にやっていくかと、どうして進めていくかというところが問題であります。そこでまず町造りのための基盤整備をやっていかなければならんわ

けでありまして、京都・大阪から三十分で行ける交通網整備が必要であります。それが京奈バイパスといわれるバイパスであり、第二京阪国道であります。六十三年国体という一つの節目に向いまして、まず京都と田辺町の間を完成することにしたしまして、今これがどんどん進んでおるんです。そして京都市と京奈バイパスを如何に結ぶかは、京滋バイパスを先ず完成させ、それに京奈バイパスを接続させることにしております。京奈バイパスからは国道二四号線と国道一号線に接続して京都市へ入ります。更に将来は第二京阪国道が京滋バイパスに交わり、京都市へ真直に北進することになります。

この第二京阪国道は京都市の堀川から油小路、そしてずうっと南へ行きまして、大阪の門真あたりまで行くところの国道になるわけでありまして、これを今年から着工いたします。そして、これは下部は普通の無料の道路でありまして、上の方が有料の高速道路であり、そして有料部分は六車線しておきまして、真中の二車線は使わずに将来高速交通を考えていける道路にいたしました。そして、この道路から京阪奈丘陵へと新しい道路をさらに設けてゆくことになるわけです。河川の整備は木津川に向って、この丘陵の方から幾つかの支流が入っております。これをいちいち整備をしております。だいたい進んでおります。また洪水調節のため湖水をつくることにしております。更に下水道整備をやらなければなりません。既に田辺町まで下水道ができてまいりまして、すでに八幡市で通水をしております。この木津川の左岸の地帯はこのように

田辺町からずうっと八幡市へかけまして、下水道ができて、さらに新しい下水道はその終末処理場を利用して、久御山町とか、宇治市とか城陽市とか井手町とか、この右岸地帯に進めており、木津川両岸地域はすべて下水道整備を進めております。さらに木津町と精華町とが京阪奈丘陵の今度のニュータウンに入っておりますので、その下水道整備をやることにしております。

次にどういう研究所をそこに立地をしてもらうかということですが、その研究所の第一号が国際電信基礎技術研究所でありまして、これはだいたい研究費の七割をですね、国の方から出しまして、三割を民間資金におおぐことに予定されており、産官学の新しい研究所方式でやっていくと、こういうことになったわけです。建設費は、関西の財界ばかりではなくって、日本全体の財界からおおぐことにいたしました。従って経団連の会長が、その準備委員会の会長をやっていただき、関経連の会長と一緒にやっていただくという目鼻が付きまして、この三月末にこの研究所が発足をいたしました。で、大阪にあるツインビルに事務所を持ちまして、四つのブランチに分かれました、四つの研究所があるということになります。研究所の建物が精華町に建ったならば、研究所はそこへ移転をしていただくことになっております。

住宅都市整備公団がまず最初に用地造成事業をやるということになりまして昨年十月に、その整備の事業が起工式を挙げて始まったわけです。今、どんどん土地整備が精華町の丘陵地帯に

おいて進んでおりまして、そこへそういう大きな研究所が立地するのであります。

それから京都におきましては、国際高等研究所が一昨年八月一日に奥田東先生を理事長としてできたことは御承知の通りであります。既におとし京都で世界の学者を集めてシンポジウムを行ってもらいまして、昨年もシンポジウムを又、国際会議場で行ってもらって、今年も行われるわけでありまして、このように国際高等研究所の研究はだんだん進んでまいっておりますが、研究所は、まだ施設はないわけでありまして国際会議場なんかを利用していただいて、そして世界的な学者を集めていただいて、京都大学やら大阪大学などが、今一緒になってやっていただいております。そういう次第であります。それで今基金を募集してもらいまして、その研究所を木津町につくるといふことになっておるわけなんです。それで京都府といたしましては、すでにその為に土地を無償で提供しようと、考えておりまして、その予算も府議会を通り用地を買収しつつあるわけでありまして、そこで金を集めてもらいますと建物もできまして、その研究所が京阪奈丘陵に立地することになりますのであります。

まあ、もう一つ文化的なもの、或いは情報化時代に即したものとしまして、国会図書館を誘致しようとして既にここ三年間国会図書館においては、ずっと調査が進められております。外国の図書館なんか調査してもらいまして、イギリスのロンドンの図書館が非常に優れた新しい型の図書館です。世界的な情報をその図書館が流しておるといふことでありまして、ま、そういうよ

うな図書館をつくりたいというのであります。それで普通の各市におきます図書館、或いは大学の図書館、そういうものの中心になります、情報提供のための図書館というものをここに設ける、と、そういう考え方ですすんでおりまして、ま、次にはこれを誘致しなければならんと考えておるわけです。

それから、それが大体精華町の一番大きな中心になる地帯なんですが、それより北に田辺町という町があるのであります。その田辺町までこの京奈バイパスがまず最初に出来るわけなんです、その田辺町に同志社大学が立地をしていただきました、この四月から開校されたわけであり、私もその開校式に出たんでありますけれども、あの同志社らしい雰囲気をもった建物ですね、あの赤レンガの建物ですね。ずっと丘陵地帯に並びまして、非常に広い地帯、大体百ヘクタールあるわけなんです。その同志社大学が出来まして、もう既にそこで授業が始まったわけでありまして、その為には近鉄の駅の改築、JRでは片町線に「同志社前」という駅もつくる。さらに複線電化を考えてゆくのであります。そういう研究所などが出来ますと、外国の学者も大勢来られますし、また留学生なんかも来られることになりますので、先ずホテルが必要ですからそこで厚生年金休暇センターをつくってもらうことにしまして、建設が始まっております。これは宿泊所であり、また休養施設であり、それからまあ研修室ですね、いろんな会合をする部屋、またテニスコートでありますとか、或いはプールでありますとか、そういうものを完備した

ところの休暇センターをつくってもらいまして、これは六十三年の国体までにオープンをするということをやっておるわけです。

それからそのすぐ南にフラワー(花)の総合指導センターを京都府が設けまして、これは農林省系統の花の研究、それから指導のセンターであります。これをこの四月にオープンしまして、今そこで新しい花の品種をバイオテクノロジーを応用しましてつくりつつあります。新品種の普及を図り、これからの新しい農業として、花の農業の導入をはかり、またフラワーパーク、要するに公園にしていくわけなんです。電信基礎技術研究所が、立地しますと、民間の研究所もいろいろ立地したいという動きが出てまいっております、立石電機KK、東洋紡KK、京セラKK、松下電器産業KK、等も研究所をつくるというようなことになってまいっております。N T Tも学校を設けようと考えておられます。新しい研究所はもう現在の京都大学の中では狭くて無理だと、いうことでありまして、今の同志社大学のさらに西の方になります、まだ調整区域で手つかずの所がありますので、そういう場所がいんじゃないだろうかと申し上げておるようなわけです。それから四手井先生の学長をしておられます府立大学におきましてもですね、研究農場を京阪奈丘陵に設けたいというようなことで、大学なんかですね、だんだん京阪奈丘陵に眼を向けられるようになってまいりました。次には、ハイテクノロジーの工場が立地していただけるようになると、かように考えておるわけです。そこで木津川の周辺は河川公園に

していくんであります。その周辺は田園地帯が広がっている。それからニュータウンは緑の中の研究所、緑の中の工場、そして緑の中の住宅と、こういうことにしたいわけです。だから緑は充分に残していきます。それからあちこちに湖水を設けまして、洪水の防除をやりますと同時に景観を美しくしていこうと考えております。そしてそこに山の手環線という大きな道路を京奈バイパスのほかに、北から南へずーっとつくります。そして第二京阪国道とこれを結びつけるわけがあります。

それからニュータウンの中の新しい交通体系をどうしていくかということにつきまして、いろいろ研究をしております。大学の先生にもお願いをして委員会を設けてもらって、やってやるわけです。それから電柱なんかも上に出さずにですね、下へ潜り込ませるような街にしていこうということでありまして、すでに筑波においていろいろ街造りが行われましたが、特に住宅とうまく調和のとれた街にしていきたいと、それから外国人が大勢参りまするので、そこに住んでいただく、そのため日本家屋とは違ったようですね、住宅を考えていかなければならない、こういうように申しております。これで割合早くこの研究所なんかが決ってまいりましたので、二十一世紀へかけての街づくりと言っておりましたが、案外早くですね、この街造りが進んでいくんじゃないだろうかと思っておるわけです。筑波のように「官」の研究所がみんなそろって移転をしたというのではなくって、やはり「産官学」が一体となった新しい方式の研究所を作っ

いかなければならぬ。こういうことでございます。ま、これがひとつのグレーター京都になっていくわけでありまして、この広い見地から京都をのばしていこうと考えています。それから更に北の方に目を転じますと、まず舞鶴港があります。神戸にしましても、横浜にしましてももう明治維新以来ですね、港づくりに携わってきたわけでありまして、百年の歴史をもっております。従ってその港町が立派な貿易港に転身していきますためには、相当の年月を要しますが、第一次の西の舞鶴港整備はだいたい完成をいたしまして、来年になりますと東の方の港もできてしまいます。しかし西港は貿易港ですが、四万トン級のコンテナー船が、接岸をするというところまでいたっております。現在は二万トン以内の船が接岸できるといような状況でありますので、さらに新しい港をつくり、少なくとも四万トン級のコンテナー船を接岸できるようにしたいと思います。こういうことで新しい計画を昨年作ってもらったわけでありまして。それで現在、舞鶴はナホトカと大連と姉妹都市なんですけれども、すでに清津航路も開けております。隣の宮津では、関西電力KKがエネルギー研究所と申しまする火力発電所を兼ねたところの研究所を建設中であります。これはいろいろなエネルギーを研究をさせていただくわけです。例えば波力によるところの、あるいは風力によるところの発電とかを研究するとともに火力発電をするのであります。

二百海里時代にあつて、できるだけ養殖漁業を進めていこうというので、国の養殖漁業の研究

所、府の養殖漁業研究所をその近くに設置をいたしまして、種魚の放流をしております。舞鶴において石炭火力の発電所の誘致が今問題になっております。共産党は反対であります。その他は全部是非早く舞鶴にそういう火力発電所を設けてもらいたいということで、町をあげて一日も早くと言っておるんであります。でそれは結局舞鶴の港がもつと国際化されなければならぬということでありまして、石炭が入ってきますとオーストラリアとか、中国とかと関係を持つようになつてまいります。現在は中国産のビートパルプとか、あるいは薬草とかソ連からの木材とかの輸入が中心であり、あるいはまあ雑貨の輸出が中心でありますけれども、もつともつと開かれた舞鶴になっていき、不況を克服しようという期待からですね、こういう発電所問題が起つておるんです。そして京都と舞鶴の間は九号線バイパスを建設中でありまして、九号線バイパスは六十三年には京都から亀岡まで開通します。そして近畿自動車道舞鶴線が中国自動車道の三田のインターチェンジから福知山、舞鶴まで建設中です。福知山と丹南町の間はもう来年の四月頃には供用開始になります。再来年の四月頃になりますと中国自動車道のインターまでの間が供用開始になります。六十五年頃には京都——大阪——舞鶴までの高速自動車道が完成し、日本海と太平洋岸とが結ばれることになり、京都府全体として、非常に明るい未来をもてるようになる時代をむかえてまいりました。ま、最初に申し上げましたように、これからなかなか厳しい時代でありますけれども、しかし京都の文化と学術が新しい世紀に向けて花開くことができ

るであろうと、こういう見込みがだいたいつきましたので、私この際、桜の花が散る頃に潔く桜と共に散り、辞めさせていたかどうかと思えます。辞めさせていただきましてからは、グレーター京都をナショナル・プロジェクトとして進めていくためには、国会でそのための法律をつくり国の力を導入することが必要でありますので、その仕事をさらにやっつけていかねばならぬと存じております。

三高出身の知事として皆様に親しまれ、絶大な御支援を賜わってまいりましたことを厚く御礼申しあげます。三高出身の皆さん方がまだお元気で、各界で活躍をしていただいていることを喜んでおります。どうぞこれからも御元気で、魂の故郷であります京都のためにもまた御尽力をお願い申しあげます。

時間がなくなりましたので、本日はこれで失礼をさせていただきます。

(参議院議員・前京都府知事)